

# 幸せな母子関係暗転

## ここにいるよ

### 沖縄 子どもの貧困

⑧

## 第1部 群像

### マユ(上)

県内の専門学校に通うマユ(19)は昨年、4年間過ごした本島の児童養護施設を出た。「もう帰れる場所はない」と思うと、不安でたまらなかった。

小2のとき両親が離婚。母と長女のマユ、長男、次女、次男の5人家族の生活は困窮した。毎日子どもたちが学校から帰るころ、入れ替わりで母が仕事に出掛けていった。「何の仕事をしているのかは絶対教えてくれないな」。朝まで帰宅しない母に代わり、弟や妹の面倒を見た。弟たちは寂しがって泣いたが「長女の自分は絶対泣いちゃいけない、って心に決めてた」。一緒に過ごす時間がない母と子どもたちの間で交換日記をし

ていた。毎日きょうだいで奪い合うように母への思いをつづつた。「あのころはほんと、幸せだった」。今も残る日記のページをめくると、生活が苦しくても楽しかった日々を思い出す。

母子の生活が一変したのはマユが小6の冬。ある日突然、母が「きょうから一緒に住むお父さんだよ」と見知らぬ男を連れてきた。男は「よろしく」と言っ

つとして鳥肌が立った」。男の視線に嫌悪感を覚えた。弟や妹たちは徐々に男に懐いたが、マユだけは心を許さなかつたため、男と母の虐待を受けた。食事や入浴を許されず、殴られ、学校にも行かせてもらえなくなつた。弟や妹は、マユとの会話を禁止され、家の中で孤立した。こっそり砂糖をなめて空腹をしのいだ。男は働かず家で酒盛り。「母が仕事に出た後の時間は毎晩、恐怖に震えてた」。中学校の制服は買ってもらえなかつた。恥ずかしさをこらえて体育着で登校したこともあるが、嘲笑に耐えきれず二度と行けなかつた。

中1の冬、「厄介者」として家を追い出され、隣の親類宅に身を寄せた。家を出る直前は母からも放置されていた。「優しかった母が変わってしまった、鬼のように見えた」。親類の家での初めての入浴。風呂場で声を上げて泣いた。お湯のシャワーを浴びたのは1年ぶりだった。「私なんか、いなくなればいいんだと思つてた」

マユが不在になつた家では弟や妹が虐待された。ベランダで何時間も足にバットを挟んで正座させられることもあつた。やがて全員、親類宅に預けられた。親類の夫妻には、マユたちと同年代の子どもが3人いた。「親切にしてもらつたけど、大勢の子どもが同居し、生活は楽ではなかつたんだと思う」



児童養護施設を出て、専門学校に通うマユ

## 「継父」の虐待恐怖に震えていた

1年ほどたったある日、夫妻が「施設に入ってくれないか」と切りだした。「ごめんね、ごめんね」。泣きながら何度も謝つていた2人の姿を、マユは鮮明に覚えている。(文中仮名)

(「子どもの貧困」取材班・田嶋正雄) 火曜木曜日掲載